

第5章

ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンと
内国伝道の古典時代

1

ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの永続的な意味

ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンはひじょうに様々な評価がなされた人である。人は今日の内国伝道の先駆者という彼の偉大な業績だけをほとんど無批判に評価してきた。そのあと、彼がなしとげなかったところだけを見て批判的な評価を始めた。今は明らかに広範囲でより落ち着いた評価に戻っている。[1]

今日、ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは天才の列にならべている。テーオドーア・ホイスは彼を19世紀、ドイツ・プロテスタントの最も偉大な人物と呼んだ。天才の列は容易に見出せるのである。[2]

ヴィヘルンは、フリードナーが評価出来なかった時代の内外の状況を、総体として評価していた。彼の将来有望で、今日もなお驚くべき、現実についての重要な基本思想の中に、一つのプログラムが示されている。

危険にみちた嵐の時代のただ中に、共産主義と無神論思想が新しい工場労働者階級の困窮した大衆の中に入り込んだ時、彼は愛の反撃をする覚醒した仲間を呼び集め、キリスト教慈善を一緒に始めるように導いた。その時、ヴィヘルンが創設した内国伝道の中に最も力強い衝撃が起こった。

教育学はヴィヘルンの中に教育の改革運動の父と、近代の青少年福祉の開拓者を見る。彼は最も重要な教育思想家として、また近代的社会福祉制度の提案者として、今日もなお社会福祉学における重要な地位を占めている。[3]

彼の天才的な先見性を示す最も明らかな例は、刑の執行に関する考

えである。法が守られ、罪を犯した人を改善しようとしている所では、今日にいたるまで人間の能力と人間社会の貧困の全体と、また解決すべき課題と除くべき暗い部分が明らかにされている。ヴィヘルンは計画的な刑の執行を要求したが、今日まで計画にとどまって実行されていない。このことについて彼は最大の尊敬をうけている。[4] ヴィヘルンは、貧困とその問題の根源に注目するまで、社会生活の他の多くの分野にも取り組んだ。このことは、彼を今や天才の人、慈善の天才にした。彼がかつて一人の天才であり、慈善の天才であったともう一度偏見なしに言える歴史的評価は、今日、過大でなくなっている。

2

ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン

1833年のラウエスハウス創設に至るまでの発展

ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは不思議な道を、彼の生と任務の頂点まで導かれた。フランスの部隊がすでにハンブルクを占領していた不安に満ちた時代に、ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは皇帝の公証人、宣誓した翻訳家の長男として1808年4月21日に生まれた。貧しいハノーバーの亜麻布職工の子であった父は努力して、御者、代書人から皇帝の公証人へと出世し、ついに10の言語をマスターした。だが、ナポレオン戦争の混乱と大陸封鎖は、資金をかけた人生上の成功を挫折させた。嬉々として歌い、教育の感激をした父、ロマン主義が好きで心から喜んだ父は、1823年消耗性疾患で死んだ。若きヨーハン・ヒンリッヒの日記は何年も続いた深いショックを記している。[5]

8人家族はゆっくりととどまることのない貧困に陥った。そこで勇敢なヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは母と6人の兄妹たちのために、養育費の支払い延期をしてもらって貢献し、有名なギムナジウム、ヨハノイムの最終学年の前のクラスから、やむなく予定より早く卒業しなければならなかった。

だが、この外的な苦しみ多い状況の中に、豊かな内面の発展があっ

た。ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンは、個人教授を通して、家庭とロマン主義と新しく覚醒した信仰に好意的をもった。ハンブルクの重要人物たちは才能に恵まれた信仰深いギムナジウムの生徒たちをうけいれた。早くも若きロマン主義者で信仰深いキリスト者ヨーハン・ヒンリッヒは、共同の闘いの中にハンブルクの重要な人たちを、圧制的な啓蒙主義と同じように引き込んだ。市立図書館員やアカデミッシュ・ギムナジウムのハルトマン教授、重要な評議員マルチン・ヒエロニムス・フトヴァルカーの中に、若きヴィヘルンは父親のような友人を得た。その生家でゲーテやすべての有名なロマン主義者が知り合いになった貴族の偉大な女流芸術家ルイゼ・ライヒャルト、信仰にみちたこの婦人は彼に大変豊富な刺激を与えた。

キリスト教ロマン主義の青年仲間、彼がそれを冗談で名づけた「ティーバックレジア」は、毎日曜の夜7時に、パンとビールを共に食べ、歌い、音楽を演奏し、夢中になった。アルスターでの夜のポートこぎでは、みんな魔法をかけられたようなロマンティックな気持ちになった。若い商人、学生、芸術家は、ここで一度は「イエス・キリスト、まことの神、そして人」の中にいた。新しい若者の世界は、ここで、なお宗教的な合理主義が支配する古い世界に向かって行った。孤独な世界をつくっていたが、人は反抗的ではなかった。このグループから幾人かが重要なロマン派の画家となり、また有名人になった。

1826年1月ヴィヘルンは一年あまり、代用教員としてプルンス私立養護学校で教師となった。「私は無作法をするずる賢い悪党たちを監督した」。彼は施設で毎週23時間の授業を行い、追加で7時間の個人授業を行い、そしてなお、ヨハノイムと大学の間段階にあるアカデミッシュ・ギムナジウムで6時間の講義を聴いた。夜ねる時間は4時間だけであった。彼はしばしばひどい頭痛を訴えた。この数年の絶え間ない過労と過敏は、ヴィヘルンの健康に永続的な障害をあたえた。この時期に彼は、私たちにいわゆる内的戦いをうかがわせる日記をつけている。ヴィヘルンは、激しい性質で、すぐに感激する人であった。彼は譲歩せずに熱心に真実を求め、自分の性質を抑制する、目立たない人生経験を神からうけた。

ここにはすでに天才的な教師が予感された。

彼に堅信礼をさずけたヴォルテルス牧師、それからジョン牧師、とりわけ彼と個人的にヘブライ語の詩篇を読み、また彼をオペラにも連れて行ってくれた聖ゲオルク教会のラウテンベルク牧師のように、非常に有能な信仰覚醒の壮年期の牧師たちは、彼が神学を学ぼうとする決意を支持した。ハンブルク教会の改革のためにヴィヘルン青年が大いに期待していた評議員のフトヴァルカーとハルトマン教授は、彼がゲッティンゲンとベルリンで神学を学べるようにした。

ゲッティンゲンのリュッケ、ベルリンにいた有名なシュライアマハーの学問的な神学の影響は、彼の視野をキリスト教界全体に広げた。彼らは、個性的な才能をもつ人を、家族、民族、教会の主要な共同体の中にはめこむ「ロマン主義神学」を教えた。ベルリンの有名な教会史家、改宗ユダヤ人ネアンダーは、キリスト教の歴史の中に、信仰生活の発言と表現の様式と、すべての信者がなす全信徒祭司制の実践を見出した。ルターの宗教改革の意味でシュライアマハーが強調する家族思想とネアンダーが強調する全信徒祭司制とは、ヴィヘルンに消えることのない影響を与えたが、彼の教師は刺激を与えるだけの人であった。ヴィヘルンはすべての人たちそれぞれから大きな影響を受けた。彼はルターとヤコブ・ベームにも大変よく学んだ。

ハレにあるフランケの施設を訪問したことは、非常に意味深いものとなった。彼はそこでベルリンの貧しい者の父、多くの学生を魅了して尊敬されていたバロン・フォン・コトヴィッツと出会った。後にカトリックに改宗した、才気あふれるユダヤ人医師ユリウスは、アメリカを手本とする広範な監獄改革を要求したヴィヘルン青年に強い印象を与えた。ヴィヘルン青年は、彼の召命に向かって成熟し始めた。〔6〕

1831年9月2日、ヴィヘルン青年は、彼の故郷の町に帰った。ハンブルクの塔のながめは特別な仕事に選ばれているという確信をおさえがたい力をもって彼の中に呼び覚ました。ラウテンベルク牧師は、ハンブルクで神学試験を受けた若き神学受験者たちをたちまち、天使のような提案によって1825年に始めた聖ゲオルグ教会の日曜学校の仕事に引き込んだ。

ハンブルクの牧師たちの中でラウテンベルクは、初めは大都市の労働者階級の間にある、驚くべき荒廃ぶりに直面し、実際に社会活動に立上った。また警察の授業監視を導くようになった市の参事会や合理主義に好意を持つハンブルクの牧師たちの多数は、都市の貧しい子どもたちの日曜学校活動を嫌悪し敵視してきたが、このような時代はやがて静まった。人は新しい上級教諭と校長にボランティアの助手によって世話をする日曜学校教師をさがし、ヴィヘルン青年を満場一致でこの職に選んだ。ラウテンベルク牧師はこの日曜学校助手と共に、子どもたちの家族を訪ねる訪問会を設立した。

ここでヴィヘルンはひどく悲惨な世界を見、ハンブルク以外では全く得られなかったような認識を得た。

ヴィヘルン青年はメモ帳に、また「ハンブルク市民の真の生活と隠れた生活」の膨大な原稿に、ひどい貧困と絶望的な道徳的荒廃について、ハンブルクの「悪党たちの地区」の悪党たちに立ち向かった多くのことを書き留めている。この記録は鋭い観察をしており、個々の似通ったケースに心を注いでいる。ここで、後のフリードリヒ・エンゲルスがイギリスの労働者階級の状況について草稿に描いた光景との興味深い類似が見出される。[7]

ヴィヘルンは、道徳を脅かす子どもたちを日曜学校でしっかり助けようとしたが、彼らが崩壊した家族の影響を受けている限り、絶望的だということを知った。彼は何を見ただろうか。4人が藁布団わらで一つの毛布の下に眠っていた廃品回収業者の家族を見た。多くの子どもたちは裸で走り回っていた。男の子たちはぼろ布を着て紐で結んでいた。16歳の娘は15歳の時から監督する人もなくうろつきまわっていた。子どもたちは洗礼を受けず、堅信礼けんしんれいも受けていない、学校の授業も受けないで成長した。若者が若い娘たちと群れ集まったならば、たちまち自明のように結婚が起こらないだろうか。ヴィヘルンは20歳の若者が16歳の若い娘と一緒に、また公共の売春婦と一緒に暮らしているのを見つけた。児童虐待は目立たなかった。ヴィヘルンは大酒のみの子どもが酔っているのを見つけたことがある。恐ろしい女性の運命が彼の眼前にくりひろげられた。

ヴィヘルン青年は、翌1833年2月25日の日曜学校協会の年会を、オープンで開くように要求した。実に千人以上の人々が、フィルター街の仕立服職人会館の大舞踏室に流れ込んだ。それは特にハンブルクの教会の歴史において、最初の大きな教会の集会となった。ここでヴィヘルン青年は、彼の生涯のなかでたびたびしたように、預言者のような迫力をもつ勧告者としてはじめて登場し、ハンブルク市民に市民社会から置き去りにされた労働者階級の家族のために慈善の援助をするようによびかけた。ハンブルクの多くの人々は、その時初めて誇らしげで豊かな都市にひどい影の部分があることを、ヴィヘルンから聞いて知った。

なおヴィヘルンは晩年に、この年会のことを回顧して次のように言っている。「私の生涯で2回だけ、そのことが私を圧倒するという自覚をもったことがある。すなわち、神は私に非常に多くの人を満たす言葉を与えてくださった。1回目はハンブルク仕立服職人会館で行われた日曜学校の祝典の時に2回目は第1回ヴィッテンベルク教会大会で、内国伝道について演説した時である。」(1848)

3

1833年ハンブルクでのラウエスハウス創設とその始めの歴史

救護施設を創設しようとする決意は、この時期、訪問会で、またハンブルクを覚醒した人たちの間で起こった。20年の間に、信仰と愛の人、長老の政府大臣カール・ジーヴェキング博士は最も誠実な友ヴィヘルンを得た。ジーヴェキングは、彼の大きな所有地の中に救済事業に自由に使える小さな藁ぶきの農家と広い庭園を提供した。倒れかかった小屋は大昔から「ラウエスハウス」という名前をもっていた。1833年4月30日、ヴィヘルンは、初めてジーヴェキングと一緒に足を踏み入れた。1833年10月31日に、ヴィヘルンは彼の母と姉妹と弟をラウエスハウスの藁ぶき屋根の下に連れてきた。

数日後、街のもっとも落ちぶれた子どもたちの中の最初の3人が来

た。その中の1人は言葉の少ない、16歳の若者でこれまたぞっとするような環境にいた。年末までに12人の5歳から18歳までの年齢の子どもたちが小屋にいた。ヴィヘルンはたいていの子どもたちを知っており、彼らの穴ぐらの住まいに、或いはまた監獄にすでに訪ねていた。彼らはたびたび石材の山の上で、あるいは広間の階段で夜を過ごしていた。彼らの1人は、12歳で92回の盗みをしたことを警察で認めていた。この子どもたちの中の7人を、両親、貧民保護者、学校教師、あるいは当局自身はおさえつけ服従させようとむだな試みをしていた。少年たちの1人はすでに鎖につながれており、彼が自由にしてくれることを知っていた。彼らは激しい自由への思いを持って、秩序や規則を憎んだ。

ヴィヘルン青年はこれらの子どもたちの「偉大な人間調教師」という評判をとった。このような人的資源をもつラウエスハウスは最も有名な救護施設の発祥地となり、内国伝道が誕生した施設となった。すべてはこの時からはじまっていて、まったく明確な教育神学のなかには、まったく明確な教育実践の全体がある！罪の力は明らかに人間がおこなうことのなかにある。[罪の力に対する]神の反撃は、キリストの啓示の出来事である。キリスト以来、恩寵の国と罪の国が劇的に対論する、この2つの国があった。すべての人は、この戦いに巻き込まれている。

信仰と不信仰との間にあるこのような現実の歴史劇の中で、人を隷属させる罪の力から救いを可能とする無条件のゆるしは、人が神と共に歩みはじめる歴史の出発である。

ヴィヘルンは子どもたちにいつも次のように言った。「私の子よ、私はすべてを知っているが、あなた方はすべてをゆるされている。」その時、彼は、他の人といる時に、昔の生活について話すことを禁じた。また彼は成長した子どもに、新しい呼び名を与えた。毎日新しい名を呼び、昔のことを思いだして他の人に話さないようにした。

彼にとって罪のゆるしと共に、信頼が教育力の第2の秘密であった。子どもがゆるしの言葉を信じるようになることが問題のすべてであった。ゆるしの言葉を信じるその時、救われるのである。「すべての施設

は、彼らが信頼を表し、その故に救護施設には壁がなく垣根もなく、錠前もかんぬきもない、スパイ行為もない、そうあり続けなければならない。」教育はヴィヘルンにとって、自由の実現以外の何ものでもなく、そのためにキリストがまず救いの業として負い目から解放し、人は自由にされたのである。そのようなヴィヘルンが子どもたちとした最初のことは、ラウエスハウスを取り囲んでいる東と西の壁を撤去することであった。繰り返し逃げ去る少年たちを、ヴィヘルンは意図的に広い道に送り出した。しかし彼が送り出した子どもたちは再び帰ってきた。[8]

だが、真の自由は、真の絆に結ばれたいと思う決心のなかにある。しつけと自由とは、互いに結びついている。子どもは自由を得た。そして、お互いがまず家のなかで体験した。ヴィヘルンは子どもたちに、真の絆を十分に替ってやることはできなかった。しかし、彼らと親しくできた。

彼は、家族のようなグループを12人から14人以上にはならないように、それぞれ年齢別の段階に分けた。自由、愛、そして喜びは、真の家族の世界をかたちづくっていく。その時、一度は大人の共同体において証あかしをするようになるその人は、実際に子どもであることをゆるされてきた、人生は子どもの世界の中で贈り物となるだけである。子どもたちはそれぞれ自由にのびのびとしており、また、お互いに他者に奉仕ぎやしゃをするためにそこにいることを知っている。彼らは華奢せいじゃくで脆弱な指導者を、互いに助け合って指導した。

ヴィヘルンは一目で見渡せるような小さな家族の共同体を実現しようとした。「その人自身の家族を他のもので代替するようなことはしない。そうではなく、むしろ12人の子どもたちが住み、食べ、遊ぶ共同体であり、そこで互いに出会い、互いの奉仕と信頼の中で、家族の指導をおこなう『兄弟』と共にその生を構成する。」[9] その時「兄弟」は子どもの上役ではない、そうではなく、年下の兄弟に仕える年長者として共同体の一員にすぎない。

それゆえ、ヴィヘルンは、受け入れられた子どもはみな彼の両親の家を疎遠にしないように、自分の両親の家に新たな愛をもつように努

力した。両親と子どもの生きたつながりを断つべきではなかった。「救いの愛の組織」であるラウエスハウスでは、小さな庭と遊び場をもつそれぞれの家に、彼らの生活をグループごとに形成した。

人は互いのために生き、各人はお互いを形成した。最初の少年家族の基礎をつくった時、子どもたちはヴィヘルンに従った。彼は最初の家をどのようにつくるのか、少年たちと話し合って決めた。掘る仕事、建築資材運搬は、少年たちがした。最初に来た少年たちは自分たちの家を建て、古い家の中に新しい少年の家族の場所をつくった。この家も狭くなって、少年たちは近くにさらに新しい家を建てた。少年たちは自分の仕事場で、後で手工業につく準備教育を受けた。ラウエスハウスで必要なものはすべてここで生産した。ヴィヘルンは元気な家族になるように、元気な民族の中のように！お互いのために働くように指導した。ヴィヘルンは、かつてこの家族の少年たちが、どのようにして秘密に相談して新しい居間の家具を全部大工仕事でつくったかを、後年、感動をもって語っている。

少年たち各人は、日常の生活の中で仕事をする時も、共同の祈りを祈り、歌う時も、自由で独立的であってよかった、また祈るとき感動することができた。子どもたちは交替で朗読者となった。豊かな祝祭文化は発展していくものである。ヴィヘルンは新しい祝祭にはいつも少年たちを集めて創意をこらした。それぞれの施設では各人の誕生日を祝った。期待を裏切られるなど、つらい経験に欠けることはなかった。子どもたちは臨港地区からの「粗野な習慣や退廃的な衝動」を持ち込んでいた。最初の年に新築した家の一つに住んでいた3人の子どものたちが悪ふざけをして放火をし、警察に引き渡されなければならなかった。ヴィヘルンは、年次報告に、捕えられた子どもの所見を控えないではおられなかった。「彼らの名前は主人が配慮して、家の記念の宴から、忘れられない別れの感動的で衝撃的な祝典の中で、正式に消し去られるまで、ラウエスハウスで、また家の中で、ふたたび語られることはなかったが、とりなしと愛の保護の中で深く刻まれていた。」^[10]

ヴィヘルンは一步一步を着実に前進した。最初の少年の家族が生まれた時、彼は助手を必要とした。ボーイゲンのハインリッヒ・ツェラー

は彼の最初の有能な「兄弟」、パーゼルからハンブルクまで歩いてきたパン屋の職人、バウムガルトナーを紹介した。まもなく、ヴィヘルンは「兄弟の家」を作り始めた(1839)。入念な理論をもつ教育は、ここでは愛の奉仕の中でなされる包括的な教育の一面にすぎない。ヴィヘルンはすべての家庭教育が教育的に生き生きとするためには、社会の中に将来の教育者と協力者の内的な支えとなる共同体は、教会の慈善活動の中にあることが基本的に大事だと思っていた。一つの養成学校から、まったく抽象的な情報がはびこるのを彼は知りたくなかった。

生きた教育の世界は、彼の教育神学から生まれた。ベスタロツィとシュライアマハーは、とりわけ彼を刺激した。ヴィヘルンは、第2の世代に属していたが彼の教育神学は信仰覚醒運動全体の基本的な態度にも通じていた。フリードナーと同じようにヴィヘルンも個人教育を一貫して細部までつくりあげた。個々の子どもたちについての記録がなされ、会議が招集され、正確な記録を持つ施設の年誌を作成し、兄弟たちは定期的に両親を訪問した。[11]

それと共に、男女共学教育は、家族原理によって、また労働社会によって親密に結びついていた。子どもはそれぞれ自分の能力に応じて手伝い、また全体に仕えた。各々の子どもは分かれた共同体の中になじまなければならない、また、この保護の中で、才能をのばすことができた。

ヴィヘルンは、教育を受ける者の人生全体の中で、若者になにが適しているのか、賜物と神の贈り物をうけとめまた影響力をもった人を受け入れるために、あらゆることをやってみた。福音は個々の人に提供されて視野を大きく広げ、人生を豊かにすると、ヴィヘルンは理解していた。彼はゆるしによって教育し、新しい生のなかで自由になっていく道を与えた。

ヴィヘルンは、キリストの賜物が決断を導き、危機を導き、従順という恵みを求める特質を知らせないではいられなかった。彼は才能に恵まれた教育者として、さんざん殴られた子どもを懲罰用の鞭で教育することはできないことを知っていた。

ヴィヘルンの場合、反法律遵守主義的興奮が観察された。即ち、彼

は「おまえは、すべきだ」といって、しつけや秩序を達成しようとはしなかった。福音が、従順とボランティアの評価を要求し、それゆえ「合法的性質」をもって愛の秩序に導くことを、彼は見落していなかった。彼は少なくとも教育が危機に陥っている意味を知っていた。またすべての教育が危機を伴い、危機に脅かされている教育を考えるべきだと思っていた。彼はそこで、教育を若い人たちの継続的な教育と理解する、そのような世俗の教育を現実の生活に近づけていた。[12]

ヴィヘルンと彼の助手は、教育活動において当初は救護施設の外では正しく理解されない教育にとどまっていた。だがヴィヘルンは処罰ではなく教育で、そして社会のために青少年を獲得することこそが大事であるという思想を少年法の中で貫いていた。1846年以來、ヴィヘルンはプロイセンで、この方向で活動した。ヴィヘルンの仕事は青少年の保護の歴史に刻印された影響をあらわしている。「ヴィヘルンの教育思想は大変高い水準を保ち、歴史のテストに及第してきたことは疑い得ない。なぜなら、ヴィヘルンの事業は、全体として福音の深みから成長したもので、可能であり必要とされるどんな批判にもかかわらず、キリスト者にとって常に新たに担いとることができ、現在も確実にその意義を高める基盤の上に立っている。[13]

4

1848年以前、ハンブルクからの ヴィヘルンの進撃と彼の活動の拡張

ヴィヘルンの大胆な事業は隠れたままではなかった。困窮を和らげる、覚醒した思想を持つ人たちがドイツのあらゆるところに現れて活動した。工業時代がはじまり、機械工場に移行する際、多くの手工業出身の新しい経営者にとって、手工業からきた多くの人たちは供給過剰となった。ここで人は意のままに扱われた。保護法はなく、労働時間の規定も祝祭日の規定もなかった。どの子どもたちにも新年の工場労働を禁じた(1839年)プロイセン最初の法律ができたが、それは新兵

招集の際に、工場から来た若者の大部分が不適格な状態であったので、軍の指示に従って公布されたものである。これから10歳以上の子どもと青少年の、夜と日曜の労働は禁止された。また毎日10時間「だけ」工場にひきとめておくことが出来るようになった。[14]

悪いのは、ほとんど精神的な困窮であった。家父長的な家内労働の解体は、数え切れない人を彼の妻も子どももひどく安い餓死するような賃金で、工場で働かせた。大農場には十分な仕事がなくなり、後に生まれた農民の子は地方から移動し工業都市の安い労働力となり、工業労働者は増大した。幼い子どもを昼の間預け、たびたび非行化する10人またはそれ以上の子が一つの部屋で藁の上に寝る、そのような悲惨な長屋の中は、特権者に対する苦い思いと憎悪が浮かび上がってくるのだった。

カール・マルクスの最も親しい協力者、フリードリヒ・エンゲルスは、ヴッパータールの信心深い工場主の家族と親しくなり、そこでグロテスクな光景をみた。日曜日ごとに信心深い工場主と手工業主は礼拝に行ったが、その労働者はひどい低賃金で工場の大部屋で働き、休日を知らなかった。このことで信仰深い人たちに対し、特に異議を申し立てるということはなかった。これらの観察がフリードリヒ・エンゲルスを革命の道に駆り立てたとは言わない。しかし、それは完全に、またさげすんだ語調で、彼がキリスト教からはなれていくきっかけとなった。[15]

だが福音派の信仰仲間たちの内で救援活動がなされたところ、そこにヴィヘルンは居合わせた。ヴィヘルンは1837年からいろんな地方で講演し、助言するためにますます招かれた。ヴィヘルンは助けのない精神状態にいる人に、こまかな理解をもち、また気づいたことを実行に移す不屈の意志をもっていた。彼は物乞いや囚人たちの信頼を得、また貴族や領主と全くこだわりのない交際をすることが出来た。ハンブルクの裕福な市民とシュレスヴィーヒ・ホルスタインの貴族たちがまず援助したが、まもなく、彼の関係はプロイセン王や、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世の城の中に及んだ。ラウエスハウスの指導と平行して、多数の手紙、文学と神学の著作をなし、第1年目をがたがた揺れ

る郵便馬車に乗って絶え間なく旅をした。[16]

ヴィヘルンの特別な才能は、キリスト教福祉に関しては手つかずのままにされていた新しい住民グループをいつも発見することであった。鉄道建設の時代に、彼は鉄道建設労働者の非常事態をみた。彼はドイツで遍歴する住所不定の多くの人々を知った。彼はパリへ、ロンドンへ、そして西ヨーロッパの工業地帯に追い払われて、そこで貧しく身を落とし教会というところで殆ど考慮されない1万人を数える貧しい手工業出身の若者たちを知った。

かつては、もっと多くの兄弟たちがハンブルクの事業の中で、彼の人柄に触れて育てられ、そこで彼らが任命されるのは自然なことであった。1837年ラウエスハウス出身の初代の施設長たちは、一部はロシアまで進出した。彼らは監獄奉仕に出かけた。「巡回する兄弟たち」は、キリスト教の文書を勧めて、牧会の努めをなすために、街や宿泊所に労働者を訪ね、コロニーの説教師はアメリカの方まで旅をした。

それと同時に男性ディアコニーの犠牲に富んだ道が始まった。ディアコニーの立場は次第に特別な形態をとり、また内国伝道の牧師たちの集まりと、そして教会全体の欠かせない助けとなった。

ヴィヘルンは、しばしばこの無欲な人たちと共に、地方の慈善活動に全く向いていない職員を、信仰に覚醒した仲間とうまく交替させた。今は、家庭生活そのものを断念したかなりの人たちは、しばしば多くの、また大きくなりすぎた任務の中で憔悴してきた。都市伝道者として、病人看護人として、長患いのまた精神病者の看護人として、乱暴な少年たちの宿泊所の管理者として、宿泊施設の指導者として、彼らは最前線に立った。彼らは施設長として、その健気な妻と一緒に、女子の救護施設を引き受けた。その雰囲気は、しばしば非常に厳しかった。また彼らは、その子どもたちをいつも完全に更正させたというわけではなかった。彼らの俸給はいつもわずかなものであった。

だが、ここでほとんど不可能なことを妻と一緒にくじけずになしとげたその人たちは成長した。例えば、彼らは孤児院に併合された巨大な農場を営み、預かった子どもたちの教育者となった。彼らは故郷をもたない子どもたちの奉仕者、また彼らの父と母となった。彼らは、船

員宿泊所の船乗りたちの扱い方を心得ているだけでなく、彼らの信頼を得、愛され尊敬されるようになった。

それは、ヴィヘルンが始めから、エネルギーに取り組み、不適合な若者たちを職業教育によって立ち直らせるという、それ以外の方法でははじめなかったので可能であった。ここで重要なことは「半分しか能力を持たない人たち」を安易に援助しようとしなかったことである。

ディアコーンはもっと必要であったが、ヴィヘルンは採用条件を厳しくし、その青年ディアコーン兄弟団によって、力強く援助した。例えば、1856年にラウエスハウスが受けた申込みが100件あったなかで、採用されたのは26件だけあった。

「ラウエスハウス兄弟団」はヴィヘルンを君主的最高首脳とする生活共同体を形成した。派遣された兄弟たちと「兄弟団」との結びつきがない自由兄弟とは区別された。1854年の1月、ヴィヘルンは困窮に陥っている派遣された兄弟たちのための救援金庫を創設した。そこから、死亡した時の寡婦と孤児の援助金も実現された。このことは老人と寡婦の援助に対する最初のゆるやかな始まりであった。

活発なディアコーンはハンブルクの郊外に集まり、気持ちの整理をするようになった。孤立した気持ちになるような人はなく、互いに遠く離れて暮らしている兄弟たちは通信による交流に加わるようになった。[16*]

ヴィヘルンはとりなしの祈りによっても、兄弟たちを結びつけた。ラウエスハウスの主礼拝、毎月第一日曜日にとりなしの祈りをし、すべての兄弟たちを思い、同じその日に兄弟たちはみな次のことを祈った。すなわち、「主よ、キリスト教徒への神の国到来を神の言葉の新しい説教によって満たしてください、神の言葉による祝福を受けて兄弟団を聖霊で満たしてください、その手の業を支配してください、すべての負い目と悪魔の試みを彼らから遠ざけ、彼らをゆるしてください、私たちが信仰によって勝利させてください。」[16**]

ヴィヘルンは後に出来た兄弟の施設のすべてを、その組織の形態の中で活発にしたのではなく、「兄弟団」が生まれたということである。

それらは始めの頃、奉仕について言えば、彼らはその奉仕のために心からの世話を少ししかできず、内的援助は不十分なものであった。[16***] 彼らは、しばしば扱いにくい費目をほとんどそのままにするようになった。会の責任者自身が実際にお金のことを心配して困窮と問題のためには、時間もないし、忍耐もしていなかったと告白することがあった。

まず、ディアコニー奉仕団と、彼らの家族との関係は徐々に改善された。ヴィヘルンと彼の「兄弟たち」がディアコニーの身分をはじめで決定的なものにしたことについて、多くの事が語られていない。ドイツの牧師館は数100年の間ずっと新しい牧師たちの植民地になっていったように、ドイツのディアコニー施設は100年も経っていない歴史の中で、同じように健全な故郷となり、そこから、有能な息子たちが牧師となって教会教育に決定的な役割を果たすようになった。[17]。

このことは、ヴィヘルンの先駆的な活動の一面にすぎない。ヴィヘルンは1843年から、この事業全体に関する彼の出版物で、「内国伝道」という表現を用いている[18]。1844年からヴィヘルンは『フリーゲンデンブレッター』[Fliegenden Blätter]を自分の印刷所で出版した。ここで援助する仲間たち全員の連帯感を強めるために社会の非常事態に関する記事、教会の姿勢と福音的慈善活動の報告を出版した。

新鮮でしっかりした語調がこの新聞によって伝わった。信仰覚醒運動の全体のように、ヴィヘルンは、理性主義の死の硬直を見つめた後に、新しい精神的な春がくるという確信をキリスト教徒に吹き込んだ。

「今日キリスト教共同体によって、これらの困窮についての情報も伝わってくるようになり、気の毒に思う愛の心が、再び動き出している。神の国が地上でキリストによる救いの愛の国として働きはじめ、また、いつも緊密に張られたネットワークに結びつけて、ドイツ全体に張り巡らされた、教えきれないほど自由な行事が始まった。ここに内国伝道の領域がある。それはキリスト教国の役人たちの手にもキリスト教会の役職者たちの手にも届くことのない内外の生活領域に神の国を再建することを目指している。」[18*]

「ラウエスハウスからのフリーゲンデンブレッター」を、初めて全世

界に向けて出版した年に、ヴィヘルンは同じように『プロテスタント教会と内国伝道の困窮』という著書を書き、はば広く世界に向けて出版した。それらは、何も知らない小市民に満足している教会に一石を投じた。状況報告のながい連載が始まった。「教会が権威的な機関から兄弟の共同体へとゆっくり変わっていく」必然性を彼は感じていた。

1840年以來、ベルリンとの関係が深くなった。ヴィヘルンは牧会を妨げられることなしに監獄奉仕を行うことができるならば、ラウエスハウスの基本に従ってプロイセン国に救済施設の管理をする兄弟を送ってもよいと申し出た。1844年9月5日、王はヴィヘルンを謁見した。プロイセン政府は監獄改善奉仕のために、兄弟の家で養成した青年達をハンブルクに送るように、ヴィヘルンと正式の契約を結んだ。ヴィヘルンはプロイセンでの勤務のために完全にベルリンに移動しようとした。

そうするうちに、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、シュヴァーネ制度[Schwanenorden]を組織し、その「男女を、身分と信仰告白をしているかどうかの別なし」で、貧窮と困窮に対する聖戦に着手すべきである、という彼の計画を公にした。ヴィヘルンは所見を述べて、それを「現在のドイツに」移し変える努力をした。彼は王に内国伝道の考えと計画を申し述べた。そして、政府の指示にしたがって、シュレージエン地方の食料不足の地域に出発した。「シュヴァーネ制度」からは、ロマンティックなプロイセン王の最大の計画と同じように、一步を踏み出すことはなかった。このことは、この王の不幸であった。すなわち、彼は天才的な個人的な着想と、祈って構想する宗教的・政治的着想によって、彼の宿命的な不毛性を覆い隠した。「彼は人を魅了する魅力に充ちた人物であったが、地上を旅する芸術家、また教理家ではあるが政治家ではない。そして彼の精神は若い時から、健康と病の間の問題の多い境界を行き来した。」[19]

だが、ヴィヘルンはベルリンにいる影響力のある人々に耳を傾けた。彼が生活に困っている人々の怒りについて、またドイツ「遊牧民」のような手工業職人の恐ろしく道徳的な荒廃について報告したとき、彼らは避けがたく近づいて来る革命の不安に耳を傾けた。1846年に終わり

のない無益な討論は何ももたらさなかったベルリン総会が行われた時、ヴィヘルンは教会会議で、私人として、牧師たちと並び、妨げられない慈善の権利に席を譲る決議を会に提案した。その時、彼は教会会議の構想の中にとどまり、土地の準備を手伝い、1848年の革命の年に、「内国伝道」を創設することが出来た。[20]

5

ヴィヘルンと同時代の人たちの革命前の不安

ヴィヘルンは、そこで彼の生涯を終えた社会変革の時代に、この不安を、誰よりも地震計の正確さをもって記録していた。彼は根本的には、すべての変化を好まない保守的な性格をもっていた。だが彼は1830年から後の10年間にすべてが激動し、心神喪失になるのではないかと思えるような不安に包まれてしまった。政治的、経済的、社会的な関係の流れの中に巻き込まれた。人々は深いショックをうけ、もう安心できる見通しを与える聖句を見出せなかった。同時代の多くの人たちは、中世の世界の中のロマンティックな過去に逃避をはじめた。明るい社会建設と聖なるローマ帝国の偉大な思想を持った輝かしい統一世界は当時のドイツ国民の数え切れない教養人を魅了した。自由主義的な市民階級は、科学技術の理想社会のとりこになり、始まったばかりの成功した技術時代の現実の生みの苦しみの痛みを宣明し、健康回復を遅らせないためにこの発展を制限すべきではなかった。だが、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスの社会の未来像はより効果的に表明された。[21]

ヴィヘルンがドイツで大規模な公共事業を始めた時に起こった革命の年に、彼が言いなすべきことはすでに準備されていた、そのことは、広まっていく不安から来たもので、残念ながら彼が努力して働きかけてきた国民の中に、彼ほど現実をしのぐ見通しをもった人が教会専門家のなかになかった。時代の混乱を收拾し、人生計画を発展させることは、神学的に整理していたヴィヘルンだけに可能であった。

それは彼の教育神学の中ですでに明らかにされていた神学的な基本見解と同じである。ヴィヘルンの神学的基礎が不確かだと繰返し非難する人はほとんどいなくなった。

たしかにヴィヘルンは、多くの矛盾した発言をしているという印象を与えたが、彼は慎重にそれぞれの異議申立てをした。そして彼の神学的思考は、なお、みごとな内的統一性をもっていた。[22]

それは救済史の方向をむいた神学である。終りの完成に至るまでキリストは救いの業による創造をなし、人間は救いの歴史と世界歴史の期待に充ちた互いの中にとり入れられる。墮罪以来、その罪を無力にする生成中の神の国と、罪の力の世界帝国という、2つの国は互いに戦っていた。神の国が新しい力を発揮したとしても、罪の世界帝国はその影響する領域を更新した。そのように人類の歴史は、世界帝国と神の国の間でその戦いの新しい頂点に向かって動き出した。このことは、およそ限られた期間に、衝突し押合うように、共に起こった。それは歴史の中でより強くそして控えめに影響を及ぼしたキリストご自身がいつもそのことを立証し、そしてそれによって反対勢力を目覚めさせてきた。

2つの国はその際、ある一定の進展をしていて、窮乏の時代と疲労の状態によってしばしば麻痺し抑制されてきた。「神の国の肯定によって、否定するこの世は、統一性をもって進行する歴史に劣るものではない。」[23] 生きるか死ぬかの戦いの中で、キリストが再臨する前に終わりを予見するものはいない。

ここに、キリスト教の出動地点があった。キリストはキリスト教だけの主ではない、そうでなく世界の主である。彼はここでも働き、キリスト教の内部で、また世界の中で、神の国の概念の中に要約されている。そのようにヴィヘルンにとって、国民と国教会への奉仕はお互いの中に並存し、結ばれていた。そして、ヴィヘルンの場合、あたかもしばしば教会序列の中に祖国を置いたかのような、印象が実際に生じうる。信念を持った愛国者ヴィヘルンは、迫りくる社会的混沌から、キリスト教、社会、またドイツ民族が再生するために、不屈の意志をもって情熱的に働いた。ハンブルクの都市の自由な市民として、共和

主義者として、彼はプロイセンと彼の不幸な王に愛情をもってつながっていた。彼の愛は全ドイツ人に注がれていた。そしてなお彼は、ドイツ国民の高い評価をうけた時、解放戦争の熱狂と国粋主義からの自由、また内国伝道を、国民のものとして求めただけでなく、同時に国を越えた課題として発展していくことを求めた。[24]

国民教会としての彼の教会のイメージは、すべての関心事を包括していた。それは彼にとって一つの神が設立したものであり、使徒信条第3項の意味で、「聖徒の交わり」[communio sanctorum]であった。それは国民を救う力をもっていた。このことはヴィヘルンにとって、国民のすべてが真のキリスト者であることを意味しているのではなかった、しかし、国民教会は、貧しい社会階級だけでなく、すべての階級のすべての人に責任があった。ヴィヘルンには、多くのあいまいなものがあらわれた。この表現で彼はあちこちで国民教会について話したが、私たちはいま、そのことに異議を唱えなければならない。そのとき、教会は今日の言葉の意味で存在していなかったということを見逃してはならない。教会生活の自立は、ラインラントとヴェストファーレンにおいてのみ、教会会議を基礎としていた。

エルベの向こう側の宗務庁は、基本的に国家官庁であった。「教会は何を必要とされているか、頭を悩ましている牧師たちが指導的立場にいるところでは、例外なくヴィヘルンの思想は理解された。」「[25] ベルリンにある「古い」募金箱について言及がされるようになり、それはずっと気がかりなものとなり、牧師たちの心の奥にある関心事は、内国伝道の事業の事が気にかかるようになって頭を離れなくなった。その結果、教会は、その責任について悩むようになった。たしかに気がかりはまったく理由にならなかった。だが真の共同体生活を再建しようとする決定的な衝動は、募金箱からはじまったのではない。

ヴィヘルンはそれを、実際にドイツの福音主義キリスト教徒と、さまざまなキリスト教の「仲間たち」とまた大衆の中のキリスト教徒と、そして国家と共になすべきものとした。活動的になりうる何か他のものがあるというのではなかった！ヴィヘルンは宣教の職務を高く評価した、にもかかわらず、それは社会的混沌に直面して惨めにも機能し

なくなっているといつも指摘した。ヴィヘルンは喜んで奉仕しようとしている信心深いキリスト者すべての人たち、全信徒祭司制の権利と義務を果たそうとする人たちと共に働いた。彼はこれらの生きたキリスト者の実りが、真の宣教であることを知っていた。

教育を働きの対象にのみなし、実際に人を保護監視し、個人の自由を奪う、そのような主体と客体の関係を激しく拒絶した彼の教育全体によると、キリスト教共同体は決して教会が関わり続ける純粋な客体ではありえなかった。教会共同体は、彼にとっていつも働く主体であった。彼は、牧師たちの教会と教会の中の「言語重視主義者」を激しく拒否した。彼は全信徒祭司制度の推進者たちの中に、豊かなカリスマ的な天才たちを発見した。彼は協力者に目を向けることだけをすればよかった。そこで彼は、信徒説教者の働きを要求した。

すべてが相互に交じり合っているように見えた。全信徒祭司制は職[そのもの]の働きから生まれ出る。それは職をもって協力する民間団体[ボランティア]の中で、独自に活動していくべきものである。彼らは自発的な仲間と共に、好事家とともに働いた。そして、結局は任命を受けた職になじめなかったけれども専門家といえる人たち共に働いた。

彼らは「この思想をしっかりと推進する人たちは、すなわち(全信徒祭司制度)の正式な職に任職なしに任命された人であり、それは言葉の狭い意味で牧師というべきである。・・・教会共同体も牧師の職に任職し、それぞれ洗礼によって聖別された。それゆえ、この職に新しい指図を必要としないということを明らかにしている。」[26]

活動的でない教会の中で信仰覚醒の神学の全体がそうであったように、ヴィヘルンが広い意味での神の国の概念をもっていたことはよく知られている。彼は独力で、ラディカルな危機意識を神学的に基礎づけ、そして神学的な歴史像の中で整理するようになった。彼の著作によると、彼が体験した現在は、この世と神の国との間の戦いの新しい頂点を意味した。「反キリスト教的なものと反キリスト教会とは、嘲笑しあなどる、また冒涇で武装して立ちはだかる組織された原理を突然見せるようになった。」[27]

この神学的基本的立場は、抑えがたい意識をもって歴史の限界を、その持っている働きと存在の神学的、教会的、あるいは政治的傾向のいかんによらず受け入れる、内的な自由をも同様に可能とした。彼の民族的愛国的な思想は19世紀の土の香りを運んでいる。また、その中で滅びはしない。彼は、国に対する愛について、民族主義者でなく、政治活動でもない言葉を語った。彼は、彼が認めなかった教会の任職に結ばれているのではなく、「キリスト教」の国家に結ばれていると自覚していた。彼は基本的に生きたキリスト教を興味深く思っていた。その時、キリスト教とは、彼にとって国家のことであった。「キリストをあなどる」ことばを彼は語らなかつた。国民の福音化とキリスト教の社会化が彼の求めているところであった。

彼は困難な事業をトルソー[未完成な像]のままにした、彼の歴史神学は、ただ一つの戒めではなく、重要な役割を彼に与えていた。しかしながら、そのことについてプロテスタントの全体が、また19世紀の不信心な市民社会全体が、同罪だというあやまった判断は、悲劇を大きくし重大なものにした。このことはさらに1848年の革命の年に明らかになった。

6

1848年の革命の年とヴィテンベルク教会大会

革命の年はヴィヘルンにとって最も重大な時になったと言える。シュレージエンで飢餓チフスが突発した。やせ細った山林労働者と職工たちはひどい目にあった。ヴィヘルンは彼の「兄弟たち」10人と一緒に、職務上の任務に急いでついた。兄弟たちはみな例外なく準備していて、伝染病地域と一緒にいった。当局は適切に対処しなければならぬのに、手間をかけてゆっくり働くと言う無能ぶりであった。千人の孤児が、国と教会の宿泊所に受入れられ、救護された。3月18日ヴィヘルンはベルリンの居城で、王に報告をしなければならなかつた。ところが、そうしているうちに突然革命が起こった。王に会いに行く

道で、バリケードがプロイセンの首都の中にはりめぐらされ、彼を阻止した。

ヴィヘルンの生涯で最も重要な時が来た。教会は突然、出来ない任務の前に立たせられたかのように見えた。教会に関心を持たない多くの自由主義者たちがドイツのいたるところで実権を持つとすれば、その場から何が起こるだろうか？無数の領邦教会の中で分裂した福音主義キリスト教徒のエコーの中に、ドイツは一つであると言う考えも見られた。初めの熱狂のあまり人は「ドイツ国民教会」を思った。そこでモリッツ・アウグスト・フォン・ベトマン・ホルヴェク(1795-1877)教授の話は、彼が全ドイツの教会大会を呼びかけた時、活気に満ちた賛意を得た。教会生活の中から、およそ500名が、1848年8月21日から23日まで、教会連盟を結ぶためにヴィッテンベルク城教会に集まった。ハンブルク教会の永遠の神学受験資格者であるヴィヘルンはその案内状に署名するように人々から頼まれるほど重要人物であった。内国伝道について教会集会で発言してもよいと言われた時、彼はそのことだけを行った。[28]

教会集会は始めから特別に不幸なものになった。ちょうどその時、フランクフルトから「国民集会に反対する暴動」の新しいニュースが届いた。軍隊が介入した。アウエルバルトの長で、若きリヒノウスキー侯は町の門の前で殺害された。ここで火山の震源のようなものがあらわれたのか？ヴィッテンベルクではこの怖いフランクフルトの事件以外のことは何も話されなかった。どうにもならない終わりのない討論は、信仰告白に違反してまで教会同盟を結ぶわけにはいかなかった。9月21日の午後、ヴィヘルンは次のように発言した。「教会大会が成果なく終わってならないのであれば、内国伝道を引き受けなければならない」。まず9月22日の午後、ヴィヘルンはいよいよ発言を許された。

ヴィヘルンがここでした演説は、歴史に足跡を残している。彼は本当に、即席で、有名な演説をおこなった。私たちは残念ながらその速記を再現したダイジェスト版でしか持っていない。教会大会の記録に、要約した報告だけが出版された。

彼は預言者としての委任を受けて、「姿をあらわしたヨーロッパ」に

ついて考えを述べた。

「前代未聞のことが起こっている。そしてなお、おそらく前代未聞のことが起こるだろう。しかし、いつ国民の生活をむしばむ内的関係をいくらかでも知って驚き、またこれからも驚くというのだろうか？内国伝道はいまやはっきり破滅の淵にいることを語り、叫び、祈り、注意し、また救いの道を示してきた。姿をあらわしたヨーロッパは内国伝道を必要としている。」

「私の友よ！福音主義教会を全体として認識することが必要です。内国伝道の働きは私の仕事です！すなわち、それは大きなしるしをこの仕事の活動につけている。信仰と同様に、愛は私にある。救いの愛は、信仰を証する偉大な道具とならなければならない。この愛は、教会の中で、きらめく神のあかりとして、燃え上がるべきもので、民の中に姿をあらわしたキリストを知らせた。活ける神のことばの中でどのようにキリスト全体が自分を表しているというのか。彼は神の行為の中でも同様に語るべきであり、そして、最高の最も純粹で、最も教会的なこの行為が、救いの愛である。この意味で、内国伝道の言葉が受け入れられた時、私たちの教会に新しい時代が始まる。」

「福音の説教者は、まず、その兄弟たちと一緒に任務に集められ、この地域の中で失われた人に関して、悔い改めをなし、その悔い改めによって共同体の全体が悔い改めへと動かされる！または、だれが、そのような悔い改めをまぬかれることができ、そしてまた許されるのか？私たちはみな主の前にへりくだろう！それは積み重なった罪責 [Schuld] であり、個々人の(罪責)ではなく、一つの罪がたんなる種でなく、譲り受けたもの、世紀から世紀へ遺産として残されたその全体であり、一つの罪責、それは今新しく開かれた時代の中で健全なものにならなければならない。この悔い改めは、私たちの教会の中で古い時代と新しい時代の境界石となる。新しい時代とその果実は、すでに終わった古い時代よりもすばらしいものとなる。」

「内国伝道は今やそのことを全く政治的に行うべきであり、教会は国家と共に滅びるのではない。たしかに、国家形態について判断する使命があるのではなく、国家形態がどうであれ、国民がキリストの霊に

満たされること、このことこそ最も重要な関心事でなければならない。」

「福音主義教会の中核と宝、すなわち全信徒祭司制度 - これは私たちには権利より義務に値するもので、その中心と保護を、神によって任命された職務の中に持っている - は、ますます内国伝道のからし種が成長し、全て影で覆う木のように主の救いの力を国民全体に告げ知らせる。」[29]

これはヴィヘルンが演説した有名な文である。そのときもう一度内国伝道は教会連合の使命を受け入れる、彼の提案を読み上げた。ただちに、出席者全員が、賛意をあらわして立ち上がった。この午後、講演のあとに、これ以上注意して聞くものはなかった。集会参加者たちはお互いに喜びに酔っていた。

この時の圧倒的な意義について、ヴィヘルンは9月23日の晩、彼の妻に書いている。「その時、神は福音主義教会の中で、まだ起こっていないような、この業を示された。この時、プロテスタント教会は、未熟なところを持つ国民教会になった。この事実の中で、全信徒祭司制の教義は始めて教会に認められた真理となった。」

ヴィヘルンは生涯の頂点に達した。ヴィヘルンは急速に変わっていく世界の中であってロマンティックな人のままであり、内国伝道によるドイツ民族のキリスト教再建を熱烈に期待した。だが、ここで、彼の限界が明らかになっている。教会大会参加者と共に彼にとって重要だったのは「市民世界の救済のために、私たちが国民を誠実にするために」教会大会に参加することであった。神に復帰したその後で、「母を民族の破滅に対する公然たる戦いに向かい武装した教会の娘として、革命の克服のために歩み出した。」内国伝道を教会の武装した娘として、国民の破滅に立ち向かい、母として未解決の戦いに向い、革命の克服のために進み出た。」

ヴィッテンベルグでは、ヴィヘルンほど貧窮化した手工業労働者たちの雰囲気を知っている人はいなかった。彼は、この憤怒のただ中で、無神論者の非常ないきり立ちと、社会正義を求める叫びを聞いた。ヴィッテンベルグで、彼は神を否定する人たちの声を引用した。

「目の見えない、耳の聞こえない神に呪いあれ
わたしたちは彼を信じていたずらに願った。
私たちは彼にむだな期待をし、待ち焦がれた。
彼は私たちをひやかし、私たちをからかった。」

7

ヨーロッパにおける幻が問題なのか？ ヴィヘルンによるヴィッテンベルクの教会大会の誤った分析

ヴィヘルンは1848年の「非常な年」に保守的気質の人たちに起こった「大災害の精神的障害」から自由ではなかった。不況からの無神論者たちの蜂起、それが下からの大衆の自助を拒み、自発的に増大するようになったという、彼の革命の説明は誤った分析であった。「ヨーロッパでは幻が問題である。共産主義という幻が」。保守主義者たちは、ヴィヘルンがこれまでほとんど知らなかった共産党宣言の、ドラマティックな冒頭の言葉が正しく表明しているような、その黙示的なレトリック〔雄弁術〕に共感をしていた。〔30〕

ヴィヘルンは、あからさまにきつい言葉をなげかける大衆について、社会的混沌へと人を駆り立てる、その根源にある力をほとんど知らなかった。見捨てられた労働者階級のなかにみなぎっている恐れと叫びを、彼が無政府主義で反キリスト教的なものと解釈し、その立場だけで神の問題を推量したのは、彼の神経質な限界であった。ドイツ人労働者大衆は反教会と反キリストの思想からうまく遠ざかっていた。その1848年という年にはまったくありうることであった。というのはイギリスと後のアメリカでは、このことが教会のとりのわけ低い階級出身の自由教会の説教者に助けられ、また教会問題とその解決を全国民の尊厳ある任務とみなすことに成功した。

もちろんイギリスとアメリカの教養人たちは、キリスト教信仰をドイツのように疎外せず、教会活動をしないドイツの国教会の方ではなく、日常的な共同作業に慣れていた。〔30*〕

だがドイツでは正当な抗議の中に無神論者の意見が混じっていることに大変衝撃を受けいらだった。しかし、イギリスで、実際に味気なく、回りくどく、単調に書かれた「資本論」が出版され「国際労働者協会」を扇動した穏やかなカール・マルクスは世界的な有名人になった。彼と穏やかな彼の友人フリードリヒ・エンゲルスを不安に思う人はいなかった。それは確かに国民自身の健全な判断であった。[31]

ともすると、ヴィヘルンは少しではなく、非常にロマン主義と結びついた神学者になり、この神学が現実を覆っていた！おそらく彼はひじょうに急速に結集^{かいまみ}はじめた労働者大衆の行進の中に、世界の反キリスト国家の行進を垣間見たのである。初期の労働運動の十分洗練されていない、得体の知れないものはこのように見られていた。

しかし、ヴィヘルンが彼の神学的な歴史観によって、共産主義を批判し誤った方向に導いたと言うことは出来ない。一方で、ヴィヘルンは何が彼を19世紀と20世紀のまったく実直で、保守的で小市民的な教会から、またキリスト教から、際立たせるのか、また大きな委託を受けて、預言者的な警告をなさせるのかについて見通しをもっていた。

他方、予想できない革命の不安、「革命の悲観主義」だけが保守主義者と自由主義者を相当悩ませた。しかしながら、ヴィヘルンは「大きな倫理的な清廉潔白」をもって、この社会的不幸について、市民社会全体の責任を明らかにした。彼はこの社会的混沌の中で、国と教会が百年も前からの負い目を持ってきたことを山の奥にしまいこんではいなかった。彼はそれを次のように語った。すなわち、ヨーロッパをキリスト教化することであって、福音化することではない。また改革であって、伝道運動そのものではない。そうではなく、領邦君主が急速に進めてきた福音の教えを移植して存在してきたのである[32]。彼は、同時代の大多数のことを、この広く大きな枠の中で見ていた。彼は彼の歴史観から、今の難局が人間の歴史のなかで最後のものにはならないことを知っていた。それを彼は人間の歴史の包括的な困窮の中でいつも最後のしるしでありつづける混乱の中においた。

ヴィヘルンが、この大きな歴史神学の関連の中で時代の混乱した状態を見ていたことは彼の強さであり、また弱さでもあった。彼にとっ

て悔い改めは、すべての人の第一歩であり、またいわゆる労働者階級の人たちにとっても、他の社会階層のお互いの中にあるような負い目と運命についても一歩であった。ここでヴィヘルンは初期共産主義と直接に出会った。だがここで道は根本から分れた。というのは、共産党宣言によると、経済的弱者を搾取する支配層は消しさられる。そして孤独で罪のない人たち、労働者階級は社会の中で権力をひきつぎ罪のない支配を導く。[33] この労働者階級のメシア的役割は、ヴィヘルンにとって世の救い主・キリストも同じように社会の不幸から出ているという事実と相容れないものであった。

しかし、無罪性に基づいた新しい熱烈な救済待望がすでに始まり。階級のない社会はプロレタリアートにとても信じられないような慰めのない状況を明らかにし、またその心を満たすメシア的世界使命感で満たしはじめた[34] 義なる世界への熱烈な憧れは、増大する大衆の中でこうした未来ユートピアにしがみついた。[35] その魅惑的な慰めに充ちた勝利を約束し、みずから同志との契約を結ぶことによって権力の座を勝ち取る知識をもつ労働者の同志の思想は、ほとんどキリスト教に耳を閉ざした。[36]

ヴィヘルンは、歴史神学によって、将来は神のみが自由にできるということを知った[37]。彼はこのキリスト教社会像を、彼の世代が解決できるものと考え、将来像として見てはいなかった。[38]

「だが、誰がこの将来を示すのか？ 誰がそれを見てきたのか？ しかし彼が共に建てるために工事現場に呼ばれており、そこで、どのようにその神殿を仕上げようとしているのか。主がいつも明らかにし、共に建てるために工事現場に呼ばれていると知らされたならば、誰がハンマーと（左官の）鍬をもちあげようとしな**い**だろうか？」[39]

神なしに、ほどよい時に、ふさわしい仕事にとりかかり、その後で心配せずに見るということは、神がむだなことは何もなさら**な**いという希望においてのみ、十分にゆる**さ**れていることが起こるのである。

社会問題解決のための、ヴィヘルンの3重の道：国の広範な社会福祉課題 - 同胞の隣人救助 - 困窮者の自助 - 社会問題と福音伝道

ヴィヘルンは1848年後に何が起こるのか、あるはっきりした考えを持っていた。彼は、国が広範な社会福祉の努力をし、適切な労働政策、経済政策、また福祉政策を行えば、大量の困窮者の克服が出来ると期待した。彼は、冷遇された階層の人たちが置かれた状況をよくすることができた。その際、大量貧窮の原因を調査し、改善の提案をする専門家の助言を用いるべきであった。それにより平穩から追い立てられ、深刻になっていく国が、その生活様式から変えられようとしていることを、ヴィヘルンははっきり認識していた。だが、ここにはすでに悲劇が横たわっていた。

国の対策は19世紀のあいだ常に遅れ、不十分であった。それと同時に、内国伝道の努力はしばしばトルソー〔未完成の像〕となっていた。国は深刻で不確かなものとなっていた。彼はかつて父権制の意味で組織しようとした、その時、彼は経済政策と社会福祉政策に決定的影響を与えることを控えたというリベラルな非難に従った。ヴィヘルン自身は教会人として国に対して、〔国が〕社会福祉の指導をする権限はないと思っていた。経済界の指導者に対しては、ヴィヘルン自身社会問題をなげかけることについて理解を求めた。〔40〕

社会的困窮だけを克服できない国の介入と別に、大衆の貧困化と腐敗を阻止するために、キリスト教徒の自助^{うなが}を始めるべきである。ここでヴィヘルンは根気強く内国伝道の活動を促した、だが彼はこの援助と救援に対して、ある種の留保をしていた。困窮に苦しんでいる人たちのその離別と孤立を援助の対象とした。

そこで、彼は、困窮者のキリスト教連合を呼びかけた。また自助と自己責任を呼びかける人たちの中に共産主義運動の正当な要素を見た。彼は困窮者の連合が、建設組合、消費組合、労働組合の代表に対してなした提案は、ふさわしい道を示していると思った。ここでも彼は社

会階層に関らないで、他に対して閉じこもる自助組織を考えてはいなかった。ハンブルクの大火災(1842)の時、粗野な日雇い農夫の子たちが自らすすんで町の消火に参加したが、その時略奪の誘惑に負ける者は誰もいなかった。そのあと、ヴィヘルンは住宅集落の設立を提案した。ここでは異なった社会階層の200家族はいつも一緒に住み、互いに理解することを学ばなければならなかった。この提案は、国営か市営かのどちらかの役所だけがまじめに受けとめ、1870年以降の、大都市の兵舎のような殺風景なアパートの中に、怖がる労働者たちを入営させるように入れるという無思慮なことを容認しなかった。ヴィヘルンはいつも大地主と賃金労働者と工場主と工場労働者を、家父長的な関係の中で、その和解が多く国民に利益をもたらすと考え、工業社会の残酷な展開を軽く見ていた、それは彼の限界であった。工業社会の中で身分の保証を求めて闘い、勝ちとるために、こぶしをあげてストライキをするドイツ・プロレタリアートの自助と容赦のない反抗はもっと強い手段を必要とした。[40*]

しかし、1848年から1948年までの道のりを見渡すと、ヴィヘルンは次のように重大な貢献をしている。すなわちドイツは社会的混沌に陥ったのではない。[41] ヴィヘルンが先駆的に指導した内国伝道の社会福祉活動は、疑いもなく社会の良心を洗練した。このことは過小評価されてよいものではない。

すでにヴィッテンベルクの教会大会が始まっていた。ヴィヘルンは次のことを要求した。「労働者階級の問題は、説教壇と共同体の中に持ちこまれねばならない。」ある種の洗練された力をもつ福音は、国民大衆のなかに再びもたらされるようになった。ヴィヘルンは労働者に伝道がなされることを願った。

「人が教会に来なければ、教会が人のところに行くのでなければならぬ。主キリストが私たちのところに来られたのであり、私たちが彼のもとに行くまで待つておられたのではない。私たちは、とりわけ巨大都市の街頭説教者でなければならぬ。街角は説教壇となる。そこで福音は再び国民にしみとおるようになる。」

ヴィヘルンはとりわけ人々が大衆化していく巨大都市の問題を見て

いた。彼は巨大都市を否定的に見ていただけではない。「芸術、工業、知識、すべての精神的能力」がそこに集中していた。[42] だが彼は損害を見て、真の「都市伝道」のたゆまない提案者となった。巨大都市は

「神から遠ざかっている知識の果実で満ち足り、もつれた享楽欲の感性を豪華に飾り立てたこの世の生活を養い高めるために、絶え間なく活動して消耗し、そのなかで間違った方向に導く文学の光によって、また - まれなケースでのみ純粋な福音が教えられているが - 神の言葉を歪曲した説教によって大衆をそそのかし、まったく政治的混乱の渦に巻き込まれている。」[43]

都市の中で非キリスト教であること、それはとうの昔に教養人の間に始まっていたことであり、下の階層に広がっていた。教養のある人がその人自身の道を行く場合、どのようにして大衆に勝てるだろうか？教会も同じようにお粗末な或いはおよその準備ではいけなかったのだ。

どこであつても困窮の状態だけを見、またあらゆる階層の国民の疎外に立ち向かう倦むことのない行動に召されているヴィヘルンの勇氣に、人は感嘆したにちがいない。ヴィヘルンはヴィッテンベルクからハンブルクに帰るとすぐに、新しく作られた内国伝道中央委員会の依頼を受けて、彼の考えと計画の全てを227頁からなる一冊に要約した。1849年のこの報告書「ドイツ福音主義教会の内国伝道」は、ヴィヘルンの他の著作のように全くよどみなく、しかも統一がとれて書かれている。[44] この警告が、とりわけ労働者の困窮の分析をなしえていることは、どんなに十分な注意をはらったことだろうか！それでも人はすぐに革命の驚愕から立ち直った。国民集會がフランクフルトでうまくいかなかったことと、外国がドイツ問題に対して冷静で控えめな態度をとっていた事態は、古い政府を再び一息つかせた。国民の離反を嘆き悲しむ声は、あつという間に一つになり、王座と救いの祭壇を結合し、そのなかにすべての救いを見た。フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は教会民が感謝することを望み、そのことを多くの説教壇で語るように求めた。[45]

1849年、ヴィヘルンの指揮下での内国伝道中央委員会活動

そこで「内国伝道中央委員会」の中に活動が生まれた。12人の委員が呼ばれた。モリッツ・アウグスト・フォン・ベトマン・ホルヴェクが長となり、死ぬ（1877年）までとどまった。彼はヴィッテンベルク教会大会を指導する招集者となり、「中央委員会」という名前の発案者となった。彼は敬虔なキリスト教徒であり、息子は大金持ちに通じているフランクフルトの一族、法学教授、ボン大学の後の理事となった偉大で豊かな人であった。ヴィヘルンはそのライネック・ベトマン・ホルヴェクの館で、しばしば客になった。彼は誠実な人柄であった。彼と並んで、代理人Fr. ユリウス・シュタール、「キリスト教国」の擁護者と、後に文部大臣になったハインリッヒ・フォン・ミュラーがいた。工場主と手工業主もそれに加わったこの要望は、独特な方法に満ちてはいなかった。国と教会、また貴族の、高い地位にいる人たちは中央委員会にとどまった。[46] しかしヴィヘルンという力に満ちたこの人は、保守的要素を強めていた内国伝道中央委員会の人事構成を、もう重要なものとはしなかった。[47] そこでヴィヘルンは、大きな会議では草稿を書いて議事を妨げられないようにした。

設立基金はとりわけ王から貸付をうけて可能になったのであり、そのためヴィヘルンはラウエスハウスに依存しなくなり、中央委員会は給料を工面できた。[48] ヴィヘルンの重点目標は可能な限り多くの領邦とプロイセン国協会を設立し、そこに人が集まるところをつくり精力を浪費してしまうことを避ける新しい基礎を定めることができた。

ハンプルクとブレーメンにおいて、課題は軽減された。南ドイツにおいても困難はほとんど生じなかった。バーデンにおいて、ヘッセン・ダルムシュタットにおいて、フランクフルトにおいて、ヘッセン・ナッサウにおいて、プアルツにおけるように、中央委員会への加入が続いた。メックレンブルク・シュヴェリンにおいてはメックレンブルク・シュトレリッツと対照的に領邦教会の指導者テーオドーア・ク

リーフォトがまず加入を妨害した。名簿にはまずザクセンとハノーファーと6つのテューリンゲンの領邦教会がなかった。

ヴィヘルンは、1849年の夏、初めて南ドイツ大旅行をし、バイエルンで多くの承認をうけた。彼のミュンヘン訪問を基礎として、1849年11月29日の上級長老会協会の承認のもとに内国伝道に協力を要請する布告がすべての牧師に出された。なおヴィルヘルム・レーエは協力を避けた。彼は同じ年にグンツェンハウゼンに一つの協会ではなく、「ルター教会の意味での内国伝道協会設立」を訴えた。内国伝道のすべての活動は牧師職に根づいてなされるべきであった。レーエが欠席した当初は、バイエルン州の協会の創立を考えていなかった。しかし、ヴィヘルンは、ニュルンベルクでのバイエルン中央伝道委員会の講演の後、また、アウクスブルクでの聖アンナ教会とミュンヘンの聖マタイ教会で、同じように、確信に満ちて満席のバイエルンの教会で挨拶をした後、次のように楽しげに家に書いている。

「私はおそれおののいてここを訪れている。しかし、主は祈りを聞きいれてくださった。ドイツにおいて心配していた反対の最も難しく最も危険な情況は克服された。」^[49]

ヴュルテンベルクには、すでに、自発的な慈善と職業の慈善のすべてに超教派の中央指導部があって、内国伝道領邦教会の基礎をつくらうという要求は感じられなかった。だが、領邦教会の最もすぐれた牧師が聞いたシュトットガルトの説教者会議は、1849年7月のヴィヘルンの訪問後、中央委員会に加入した。ヴュルテンベルクとの人的関係は回復し、まずはこれで十分であった。

ヴィヘルンはプロイセンの8つ地方で、すぐに目標に達したのではない。ポーゼンでの始まりはささやかであり、ボンメルンで内国伝道はより豊かに伸びた、ヴィヘルンはブランデンブルクとシュレージエンにおいては成功していない。ザクセン州においては、「ザクセン領邦教会中央協会」として、グナダウ牧師会議が直ちに加入した。しかし、ライン州のとりわけヴェストファーレンにおいて(およそ500施設と社会福祉施設)は、その活発な活動をし、元気な信徒が運営する教会によって、内国伝道は最も豊かな花を咲かせた。

ドイツ領邦教会とプロイセンの指導者たちは、彼らの協会を引き継いで、中央委員会が信頼する「代理人」と呼ばれた。人はこの「代理人」と「通信員」とを - ブラウンシュヴァイク、ハノーバー、オルデンブルク、ホルシュタイン、メックレンブルク、シュヴェリンにおけるように、ザクセン王国で、またテューリンゲンの一部の国々で、なお加入していなかった - 領邦教会の中で見た。困難を克服する最初の8年間に、すべてのドイツ領邦教会と緊密な関係をもつ中央委員会があった。今は互いに選ばれ、中央委員会を超えて、お互いに調整し助け合う、それぞれが先駆的な男女の自由な献身による、生きたキリスト教のグループからなる多様な協会と施設がすでにあった。

主な仕事がヴィヘルンの肩にかかっていた。彼はなんと多くのことを自由な決断力と協力によってなし、生きた福音的キリスト教が成長していくのを見たことだろう。子ども、病人、老人、長患いの人、身体障害者と精神障害者のための自由な福音的施設と基金、特に危険な状態の人、あるいは移民、船乗り、内陸航路船員、出稼ぎ労働者、その他中毒患者のすでに「沈み込んだ人たち」の、からだと心の看護と治療、救援のための福音主義協会が成長した。囚人と出所者、無宿者、中毒患者は、世話を受けるようになった。キリスト教文書と新聞と良質な国民文学を生産し普及する協会、様々な種類の福音主義青年会が生まれた。兄弟の家と姉妹の家が創設された。信念を持ったキリスト教の看護と教育の働き人が営む教育施設は、都市伝道者と国民伝道者、青少年看護者と共同体の援助者たちが、古い修道院のように影響を及ぼす教会の地域全体のセンターを形成した。個々の教会のグループと個々の共同体は、内国伝道地区協会、男性の訪問会、そして施設の中で助け看護する女性の会、民間で維持する姉妹の共同体ステーションができた。

特にヴィヘルンは都市伝道に心を配った。彼はロンドンを模範にしてベルリンで最初の都市伝道をつくった。彼は、とりわけ売春と同棲に対する戦い、アルコール中毒に対する戦いを課題とし、給仕人、貧民援護、移民労働を課題とした。[50]

コルピングの職人協会と同じ、「故郷の簡易宿泊所」もまた、それに

属していた。ポンのクレメンス・テオドーア・ペルテス教授(1809-1867)、有名なハンプルクの書籍商、フリードリヒ・ペルテスの子は1854年、ボンではじめてのユースホステルを始めた。彼はヴィヘルンの演説をヴィッテンベルク教会大会で歓迎して迎え、中央委員会の創立の時にも同じように、1849年に新しくつくられたポンの内国伝道教会議長を引き受けた。なお同じ年に、彼は、ボンで貧しい家族のそれぞれがヘルパーと助言者の特別な看護者を受け入れるようにした。だが、彼は最も大きな困窮を、当時の遍歴職人たちの荒廃ぶりに見た。同業組合の簡易宿泊所は、ずっと昔に衰退しており、遍歴職人はふしだらな旅館兼居酒屋をあてがわれた。彼らは家主から物乞いに施す人の名簿を手がかりにするようにすすめられ、毎晩簡易宿泊所での飲食にお金を浪費した。申し分ないキリスト教ユースホステルの開設によってのみ、この悪を防ぐことができたのである。

ヴィヘルンはプロイセン王の高額の出資をうけて、ボンに最初のユースホステルを創設した。ペルテスとヴィヘルンは、彼らの中で後々まで影響を及ぼした北ドイツの信仰覚醒運動の典型的な代表人物であった。彼らはこの活動的なキリスト教を、1830年にヴッパータールで、彼らが社会的に無知であったために、大変な災いをひきおこした「この地の穏やかな人たち」と区別した。[51]

ユースホステルは、初めは、かなり心ひろく、家庭礼拝の参加を強制せず、トランプ遊びも許可していた。だが金もうけをやめさせることができず、会話を楽しむ夕べの習慣も無視された。ユースホステルは家庭原理に従って、組織されるようになった。キリスト教信仰を証する手工業主は、家長として妻と共に、皆と食事をし、影響を与えた。ボンでは最初にラウエスハウスの奉仕者がこの奉仕を引き受けた。[52]

この事業がまったく問題なく発展したというのではない。すこし離れたところにある中央と北部ドイツのルター派領邦教会は彼に反対を伝えた。クラウス・ハームスのような厳格なルター派の人は、ヴィヘルンの活動に危険を感じていた。牧師は自分の教区の中だけで働くべきだ。人はことによると自由教会が努力してきた民間協会を信用しなかった。説教と信仰告白とは競争相手をもたなくてよかった。内国伝

道の中で、信仰告白の堅い土台は重んじられた。

このグループの中で、内国伝道は教会の木に生えた、有害なつる植物である、という悪いことばさえももれていた。人はその没落を預言した。だがその時、ハノーファーに父のような人、ルター教会で内国伝道と中央委員会の中で真理のために働くという健全な展望が心を揺り動かした、ゲルハルト・ウールホルンがいた。ヴィルヘルム・レーエも次第にヴィヘルンに通じるようになった。ヴィヘルン自身このルター派の人物に、神学的発言の中でより注意深くなり多彩に光る多くの発言をして貢献した。[53]

もう一つの攻撃が内国伝道の中で、プロテスタントと対をなすイエズス会の権力中枢に肩を並べようとしている自由主義によってなされた。アドルフ・ディスタヴェクは自由主義教師全員の名において警告し、内国伝道をイギリスの盲従だとか、道徳の危険、精神の自由、反動的思想だと言って非難した。だが、この攻撃により、神学的自由主義というものが非常に明確になり、また、最も活動的な代表の中に社会福祉事業の真の協力が、完全に準備されていた。

だが、ここでヴィヘルンは、内国伝道には、すべての人が自由意志で基礎をつくり推進し後援する、その全く人格的な指導力と誠実に頼らざるを得ないことをはっきり認識した。だが体制教会[verfa^ote Kirche]とその職務機構の中に、しっかり保障し内国伝道を組み込むことはしなかった。

10

教会ディアコニーのヴィヘルンプランとその運命

これまでヴィヘルンは、困窮の最悪の状態に出会うように、ラウエスハウスの兄弟たちを問題の場に送った。諸施設と内国伝道協会は、しばしば偶然に、その多くは特別な困窮が信心深いキリスト教徒を目覚めさせたそのところでのみ生まれた。だが、多くの共同体がむなしなものとなり、そのなかで困窮し危険な状態にいる人にどんな方法で

もかかわろうとする人は誰もいなかった。それと同時に、ヴィヘルンが内国伝道を攻撃し反対する全ての人に対して、国が現代生活の困窮に対しのように、牧師階級の拒絶を指示したことは、結局なされなかった。[54]

ヴィヘルンの天才的な特質は、彼が包括的に考え計画するまれな才能をもっていることであった。「偉大な人物は偉大な思想家と隣り合わせている。」

ヴィヘルンは、施設がまだ十分でなく、困窮と途方にくれた状態が増大し、運命を克服できなかった家族の困窮と、国じゅうの家のいたる所にいる多くの孤独な老人が増加するのを見た。そしてなお彼らを進んで助けようとするものはいなかった。また、市民の貧民救援はかなり官僚主義化していて、また相当あけすけな共同体エゴイズムに市庁舎を明け渡した。

そこでヴィヘルンは、詳しい解説の中で、体制教会とその共同体の新しくなった義務と、それを中世後期に市民共同体が受け継いで、再び新しいものにするための、すなわち、困窮者たちの世話をまじめに取り上げるといふ、古くからの課題を宣言した。彼はまたここで都市と、共同体と教会の職務上の貧民救護での有効な仕事の配分を考えていた。彼は、施設と、病院の閉鎖的な救護を市民共同体にゆだねるように求め、開かれた救護、彼らの居室に住む「貧民」の「家庭貧民救護」を教会共同体にゆだねるように望んだ。

ヴィヘルンは1848年以降、さまざまな経験をしなければならなかった。その熱中の中で多くのことが和らぎ、そのあと「革命による精神病」、「革命による悲観主義」のショックが起こり、古い関係は見たところ破られないで進んでいた。彼は既制教会のディアコニーにとって、自発的[ボランティアの]力は結局、間にあわなくなると思っていた。もっと広いところで、各教会の信徒たちが、内国伝道の自発的な突撃班と一緒に、ディアコニー職の指導の下で、慈善奉仕を始めた。[55]

この規則をもつ教会ディアコニーは、牧師と信徒の非自発性と恣意も同様に、自発的精神をもつ教会の類まれな存在の本質を受け入れなければならなかった。教会の職務は、個々の教会共同体におけるディ

アコニーの責任の全体を定め、そして固有のディアコニー職の中で目に見えてくるようになるのでなければならなかった。

ゲルハルト・ノスケは - ここで、からだと心の貧困という魔物に対して、また共同体内の相互の無関心と、欠けている兄弟性に対して、彼が戦った生涯の戦いの中で、ヴィヘルンが最後にもっとも心にかけての努力が問題であると、正しく指摘した。[56] フリードリヒ・ヴィルヘルム4世が引退した後、ヴィヘルンは、これ以上配慮する義務はないと感じた官職教会[amtliche Kirche]による拒絶にあった。

ヴィヘルンの教会ディアコニー計画は、1855年の講演の中でまた、その翌年の所見に述べられている。

1855年2月19日、ヴィヘルンはフリードリヒ・ヴィルヘルム4世と、国と教会の多くの指導者が出席したベルリン福音主義協会会館で基本的な考え「教会の、市民の、また自発的な、貧民救護について」を公表することができた。2日後、ヴィヘルンは、講演について最も高い関心を彼に示した王のそばで、宴席に列席した。ヴィヘルンのスピーチは、よく知られた王の高教会好みによって、特別に気に入られたに違いない。というのは王の高教会の「夏の夜の夢」は「監督・長老・ディアコン」という神が定めた三つの使徒的職務の復活を目指していた。彼が共同体にふさわしい奉仕職と並んで自由な協会的な福音主義奉仕活動[ディアコニー]に関心をもっていたかどうかはこの時は明らかでない。王はまた目前に迫っている大きな教会会議は、問題を新しく取り扱うべきだと指示した。[57]

ベルリンにおける福音主義教会総会の指示にしたがって、1856年、ヴィヘルンはなお詳細な「奉仕活動と奉仕職に関する所見」を書いた。王との基本的な関係として「モンピヨウ会議」が定められた。この会議は - 福音主義教会総会のディアコニー覚書に対するヴィヘルンの詳細な、またフリードナーと3人の鑑定人たちの簡潔な - 見解を提出している。

1856年のモンピヨウ会議は大変うちとけて経過した。フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は、1846年から全教区の活動のための教会総会をつづけ、プロイセン領邦教会会議を準備するために彼らを招集した。

ヴィヘルンの提案は、明確で具体的であった。国の管理のもとに、理論的にも実践的にも、唯一の福祉活動を提供する統合された職が設立されるべきであった。

どの教会教区も教会のディアコニーの責任を代表してきた「役員会選出長老の大執事」を任用するべきである。教会の各教区のなかに、何らかの形のディアコニー職が創設されるべきであった。それと並んで内国伝道民間協会も同じように仕事の分野を、小教区をこえて活動範囲を十分保持すべきであった。

国と教会との組織的な関係のなかにもたれらされるべきディアコニーの根本思想は合致していた。その基本的な決定は「無害なもので、だれにも大金を使わない」ものであった。だが実際に実施してみると、問題は「教区総監督の長、本省の官吏、教授のすべてがいて、彼らはハンブルクの大学生たちの革命計画と一緒に反対し、会議にずっと参加しなかった」ことである。そこで義務のない推薦をする「大執事」の考えは希薄となり、執事会の内部で、必要ならばだれでも「看護をすでにしている、あるいは必要不可欠としてなされているディアコニー」に委託すればよいというものであった。

それは遠まわしの拒絶以外の何物でもなかった。

王は完全に - 彼が最高監督として教会の頭であり、王の布告によって「大執事」であるという - ヴィヘルンの見解と同じものであった。だが、決断が問題になった時、王はいつも決心を避けた。[58]

万事が昔のままであった。政治に期待し失望した意欲ある人たちは、ショーペンハウエルの悲観論に心を開いた。宗教心を持つ人はカトリック教会の膝に保護を求めた。マインツでは、フォン・ケッテラー監督が社会思想を開陳し、マルクス主義に行ってしまううちに、カトリックの労働者を、多くのプロテスタント教会より多く、結びつけた。またその時、宗教問題で反宗教の一派と一緒に成れない労働組合のグループが、ドイツ・プロテスタントの内部につくられた。[59]

そこで、王は最良の説教師を招いたベルリン福音主義教会に、重要な廷臣、高級官僚、そして善良な市民たちのすべてを説教壇の下に集め、玉座と説教壇の統一が国と教会の柱であることをはっきり示した。

労働者について語るものは誰もいなかった！2年後、フリードリヒ・ヴィルヘルム4世は不治の病にかかり、彼は統治を断念しなければならなかった。政治体制に変化がおこり、ヴィヘルンの教会ディアコニーの計画は完全に解決済みとみなされるようになった。まず、20世紀の厳しい大試練、即ち、マルクス主義労働者内部での大量の教会脱退運動、1933-1945年の教会闘争、1945年の崩壊、そして教会生活の再建、ヴィヘルンの問題は、自由教会に発展した国民教会の宿命的な問題を生み出し、教会ディアコニーをもう一度新しく緊急に問い直した。[60]

11

ヴィヘルンのプロイセン官職への加入 - 挫折した監獄改革 中央委員会大会での社会問題 - ヴィヘルンの病氣と死

1857年、王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世はヴィヘルンをプロイセンの国務に招いた。ヴィヘルンが感動して招聘を受けた本当の理由は、まったく明らかにされていない。それは、福音主義教会として、ドイツ市民階級にある非常に多くの無思慮と怠惰に忍従する始まりとなったのだろうか？^{しるし}というのは、少数の人だけが彼の招聘をまじめに受けとめ、そして時の徴に気づいていた。あるいは、懲役囚への大いなる同情が、彼をこの歩みへと駆り立てたのだろうか？王は、彼と監獄奉仕に指名された粗野な日雇い農夫のディアコーンに自由裁量権を与えた。

くりかえし、また、たゆまず有産階層に悔い改めを呼びかけた窮屈な預言者は、お役所仕事と記録文書の中にすっかり埋れるようになった。人は、しだいに彼におしつけ、確実に棚上げにした。「宗教的な」監獄改善に反対する報道合戦がはじまり、ラウエスハウスから生まれた2つの監獄奉仕は、モアビートの独房監獄で監視奉仕をするだけという愚かでまずいことが始まる瞬間だけを待っていたのである。

1862年10月2日、プロイセンの参事官であり、そして教会総会議長

に任命された名誉博士、ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンはプロイセン議会の前に立った。大論争がおこった。11年来、ヴィヘルンはプロイセン刑法の中に監獄改善を定めるために戦ってきた。彼はプロイセン中の監獄の調査を委託された時、すべての国を旅行して回り、すべての監獄を視察し、どんな田舎も見て回った。彼はそこで見たことについてショックを受け、次のように書いている。

「私は、裁判長官、当局の長官、そして強力な財政長官にも、4週間だけ、刑務所と監獄を案内してもらうことを願い、それと同時に、彼らがまったく惨めで、天罰として私たちの民族に重くのしかかった現状を自分の目で見るようと願った。」^[61]

ヴィヘルンは大いなる同情をもって見捨てられた子たちのために努力したラウエスハウス出身の彼の協力者に助けられて、ひどい苦境をほとんど取り除いてきた。ヴィヘルンにとって、キリスト教共同体と監獄の内外の解けない関係はそのままであった。彼は、その兄弟を壁の向こうに訪ね、主の言葉「私が囚われていた時に、あなたは訪ねてくれた。」という言葉を思う成熟した信徒、クリスチャンになることを望んだ。誰一人失われてはならないのだった。

あの記憶されるべき1862年10月2日、会議では根本的解決が問題であった。だが、満ち足りた自由主義の市民階級の無思慮と抵抗が、ここで反対して彼を打ちつけた。自ら苦しめない人たち、社会的危険に自分をさらさない人たち、いわゆるノーマルな市民階級の人たちは、非常に多くの不義を見逃すりべラルな自由思想の名において、「宗教的な」監獄改善を拒んだ。ヴィヘルンが呼び覚まそうとしたあの社会福祉政策のひかえめなスタートは、19世紀後半の市民階級にしっかり居座った自由主義思想と唯物思想につまずいた。

だがなお、ヴィヘルンがプロイセンで恥入らせられたあの総会で、自由主義者たちに敗北した時、人々は反対して立ち上がり、ヴィヘルンのために証言した。ジャーナリズムにおいては、不名誉な攻撃を受けた審議官と彼の前に身を置くべき大臣たちは沈黙した。しかし、かつてヴィヘルンがロンドンで苦難に満ちた地区を案内したことがある進歩主義の議員フォン・ブンゼンは厳粛に説明した。「私の人生のめぐ

り合わせは、直接間接に何度も彼と接触し - そして、彼がいることで不適切であるかもしれないが、私はこの人はドイツ国民の名誉であり、数少ない偉大な人たちの一人である - という堅い信念を公然と繰返す以外にできなかった。」

非常にたびたび誤解され、非常にまれに支持されたヴィヘルンは、この同じ時に内国伝道の会議で絶えず社会問題を前面に押し出して強調した。この会議は、中央委員会がいつも専門特別委員会をつくって、ドイツ中を巡回し、1872年までには徐々に人気をなくし、中止するようになった教会大会と結ばれていた。会議が、1849年、もう一度ヴィッテンベルクで、開催された。1850年シュトゥットガルトで、1851年エルバーフェルトで、1852年ブレーメンで、1853年ベルリンで、1854年フランクフルト・アム・マインで、1856年リュウベックで、1857年シュトゥットガルトで、1858年ハンブルクで、1860年バルメンで、1862年ブランデンブルクで、1864年アルテンブルクで、1867年キールで、1869年シュトゥットガルトで、1872年ハレで会議は開催された。[62]

60年代に労働者階級のデモが始まった。1853年、内国伝道会議で、大都市教会の状況について、1857年地方住民の社会的不利益が話し合われた。

ヨーロッパを旅してまわった多彩な識者ヴィトール・エメ・フーバー（1800-1869）は社会問題を討議し同じ思いをもって労働者階級のために尽力したヴィヘルンを励まし、後ろ盾になった。[63]

フーバーは、最初の福音主義キリスト教徒として、労働者階級の自助を、経済協会と共同体の住宅を通して行うという、当時の新しい大衆の要求を支持した。ヴィヘルンはフーバーの著書「庶民の住宅難」（1857年）を『フリーゲンデンブレッター』の中で論評し、住宅問題は「今日の社会の根本問題」であると言った。住宅問題の根本悪は1857年シュトゥットガルトの教会大会で強調され、そして、結局もういちど「国の福祉」を呼びかけた。1857年11月労働者の住宅問題はヴィヘルンによって、なお中央委員会の中で課題となっていた。ヴィヘルンは「この事柄をその計画の中に入れる」ことを目標とし、反対者にも突きつけた。その問題はどちらかといえば、特別委員会に委ねるべきであ

り、中央委員会の業務にこれ以上の負担をかけるべきではなかった。この社会福祉問題は中央委員会にそぐわなかった！1848年にくらべて世論はどんなに急激に変化したことだろう！庶民の住宅難に関するフーバーの著書は、委員会の信頼できる人たちのあいに広く知らせる用意があったと言っただけであった。ハンブルク教会大会のためによく考えられた労働者住宅問題に関する特別会議は関心不足のために実現されなかった！

ヴィヘルンは、1860年のバルメン教会大会でもう一度社会問題を強調し、その時、人は「工場労働者の事を特別に考慮して、労働者住民の女子青年の教育と保護について」話した彼の講演をじっと聞いたに違いなかった。けれどもここで控えめであってはならなかった。ヴィヘルンはバルメンで、有名な工場主の前ではっきり言った。「私は、忠告に従わなければならない、従ってきました、数年来、真摯に取り組んでいるこの地の信徒です。」^[64] 有名なキリスト教工場主と、ヴッパータールの市長からなる委員会は、提案された問題を解決しなければならなかったが、それはすべて再び眠りについた。

1862年フーバーはヴィヘルンと一緒に、ブランデンブルク教会大会を進めた。「労働者階級の組合自助」という題のフーバーの講演は、別に印刷されて中央委員会から配布された。「内国伝道は活動的な社会福祉政策をとりあげねばならない」というフーバーの切なる勧告は、無視された。1863年と1868年、労働者問題は再び論じられるようになった。だが1869年、ヴィヘルンはシュトットガルト教会大会で「現在の大きな社会問題、特にいわゆる労働者問題に関与しない」ことを非難した。

ヴィヘルンはシュトットガルトで折衝した後、仲間を結集して労働者問題を復活する行動に移った。自由主義の反対者が、多数の若き国民経済学の教授たちが支持している社会改革の方向を名乗っているように、ヴィヘルンはいまや内国伝道を講壇社会主義の軌道に結びつけた。ヴィヘルンは、彼が招集した1870年の5月会議で「講壇社会主義」と関連して、経営者がこれまで以上に広範囲に没落しないで、キリスト教の中でのみ最も深い基礎をもち、そして人間性をもたらす人として、

労働者を守るならば、法律の制定でなく、なんらかの経済理論でもなく、社会的平和を守るようになる、という確信をもう一度もった。[65]

1年後、ヴィヘルンがベルリンの10月集会で社会主義の労働者を、浮浪者となった譬話の放蕩息子と比較したことは、誤解を招いた。しかし、ベルリンの国家学者アドルフ・ヴァグナーが、多くの社会主義の要求を正当と認め、教会に課題を示し、説教によって、「とりわけ、上の人たちに向かって、そして次に下の人たちに向かって社会的義務にとりかかるように」指示した講演に、ヴィヘルンがどんなに率直に賛成したか人は知らなければならない。アドルフ・ヴァグナーは講演の中でヴィヘルンの思想に依っていた。それは社会情勢の中立的素描のように、それがアドルフ・ヴァグナーによって強調されたように専門知識によるもので、集会の満場の賛意を得た。「だれもが自分の持ち場で、また自分の職業において今日の社会的課題」に協力しよう誓ってする行動は、教会でも内国伝道でも起こらなかった。[66]

ヴィヘルンはもう老人ではなかった。1866年の春、彼は短い間に2回続けて卒中発作を起こし、仕事をする力を失い衰えていった。1874年、彼は体が弱り、死にゆだねた人として、プロイセンの国務を最終的に去った。1874年4月4日から5日の夜、若い時からの予感された遺伝的な猛烈な頭痛がおこった。脳の病気が突発し、新しい卒中の発作が起こった。7年間ショックを伴う苦しみの時が続いた。ゆっくりとした死が訪れた。強迫観念と突然の怒りの爆発は衰弱した人たちと周囲の人たちを苦しめ、そしてたびたび彼らを休ませなかった。1881年4月7日、ついに死は彼を解放した。

12

ヴィヘルンの遺産

誰もショックを受けることなしに、この最後を読める人はいないだろう。ヴィヘルンは生前に多くの批判をうけた。彼が目指し、戦ってきた多くはトルソー[未完成の像]のままである。労働者たちはプロレ

タリアートの悲惨を自発的に克服しなければならなかった。ヴィヘルンはその時彼らの邪魔をしたのではない。彼が社会に呼びかける起床の合図と警告は、無益な救助奉仕ではなかった。

内国伝道が大きな木へと成長し、そしてドイツ福音主義キリスト教会の決定的な生の証^{あかし}として10万人の絶望している人たち、捨てられた人たち、そして病気の人たちを助け、数え切れないほどの涙を乾かしてきたことは、統計的に処理できることではない。

彼が直接につくったハンプルクのラウエスハウスとベルリン・シュパンダウのヨハネシュティフトは今も存在している。

既成の教会が、奉仕と伝道をおこなう会衆の教会になるように、彼が求めた変化は、次第に始まっていった。

国は、ヴィヘルンが望んでいたように、内国伝道の協力により広範な法律をつくり、社会福祉政策の推進者となり、連帯原理に自己責任原理を結びつけた。病気、身体障害者、老人の大きな人生の危険は保険制度によって、我慢できる程度に和らげられた。事前の備えと自助との一定の関わりの中で、最後に残った空白をうめることが20世紀全体を特徴づけた。[67]

疎外された人たちを、とりわけ待っている労働者階級をキリスト教に、また教会の中に、教会と共に、活気をとりもどそうとする牧会的・伝道的運動としての内国伝道は、なおその端緒に立っている。ヴィヘルンが提起したように、実際に福音の力をもって人々に行き渡る内国伝道の問題は、まだなお未解決のままである。

ヴィヘルンは、実際に内国伝道の周辺を思索しながら、実践しつつ、調べながら歩いてまわった。彼と共に内国伝道の古典時代は終わった。後に続く人たちは19世紀における内国伝道の最も偉大な天才的人物に繰り返し師事するに違いない。